いま英米文学をどう読むか

新しい方法への試み

新英米文学研究会
創立10周年記念論集

新英米文学研究会——編

三友社出版

およびに社会や歴史とのかかわりで捉え、研究しようとする新しい方法への試み。日本文化の民主的民族的発展をめざし、個人研究と集団的討論の統一的発展に挑む意欲的かつ多彩な論稿群。

ま英米文学をどう読むか

い方法への試み

新英米文学研究会 編

いま英米文学をどう読むか

1981年11月15日初版発行　　定価 2,200 円

編　者　新英米文学研究会
　　十周年記念論集刊行委員会

発行者　広　永　正　也
印刷所　福音印刷株式会社

発行所　三　友　社　出　版
〒112 東京都文京区音羽 1—19—23
☎(03) 946—0285　振替 東京 4—61642

カバー・表紙装丁　塩沢美智子

真の叫びをこそ

——文学研究に問われるもの——

日高八郎

新英米文学研究会が創立十周年を迎えるという。そう聞いたとき、一瞬私は、これは二十周年のまちがいではないかと思った。この錯覚は、私の老化現象は措くとして、この研究会がきわめて密度の濃い十年の歴史を歩んできたという事実に由来するといえよう。

そのような輝かしい実績に対して、私も声を大にして讃歌を捧げることを惜しむものではない。しかし、私の実感は、ただ第三者として拍手を送るというより、この会からつねに受けてきた無言の刺激への感謝の念が先立つのである。そもそも、会員自身、会の被恩恵者であるし、私もその恩恵乃至余慶を受けてきたというほうが適切なのである。そして、私の理解する限り、この研究会の第一の特色は、英米の文学をつとめて現実の人生と世界とを踏まえつつ研究する点にあった。そして、論文や研究発表やシンポジウムや討論や合宿等々を通じての積極的かつ粘り強い活動を、私はこの会の第二の特色とみてよいと思う。

さて、私に与えられたこの貴重な機会に、文学研究について、最近私が感じている一端を述べたいと思う。それは、つまるところ、文学の研究とは何かという手垢の付いた問題にも係わるのだが、こんな難問をいまここで取り上げるわけではない。もう少し軽い、私の偶感といったものである。

去年の暮、私は、ある雑誌の依頼で、日本の著名な英米文学者たちの記念論文集について、短い感想を書いた(『英語青年』三月号所載「記念論文集花ざかり」参照)。最近、停年等で国公立大学を去った五教授のための論文集が次々と私の書斎に持ち込まれ、合計六冊、延べ一九一篇、二八三〇頁という恐るべき量の論文集について何かひとことをとマイクを突き出されたと思って戴けばよい。無茶な注文が阿呆な私に押しつけられたわけだが、それはともかく、多数の論文を走り読みしていくうちに、いくつかの感想が湧くのを禁じ得なかった。論文のスタイルについてもその一つだったが、それについては右の小文で触れたから、ここでは繰り返さない。

論文を読みながら、私は一種の誘導尋問を受けているような気分を、何度か味わった。通常、論文は、ある主題に基づき、ある結論へと読者を導く。そして、当然のことだが、論者はその結論の正当化に力を注ぐ。数学でいえば、ある定理が成り立つことの証明部分が論文の中心部分を形成し、いかにして読者を説得し納得させるかに論者が最も苦心するのもこの証明の部分といってよい。そして、その説得力の強弱によって、その論文の評価もわかれてくるのである。

さて、私の個人的な体験からいうと、私が困惑させられるのは、その主題の証明の妥当性や説得性の有無の点よりも、その証明のための論証が、確信を以てなされていないときである。数学とは異なり、文学の証明には、論者の主観が反映するだろうし、事の性質上、そのこと自体は、排除されるべ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きでも、非難されるべきでもない。

私がときに当惑したのは、論者の確信性が薄弱だったりあやふやな場合であった。その曖昧さが曖昧さとして表出されているかぎり、それほど害はないが、最も困惑させられるのは、証言が表向きは確信に満ちていながら、よく読むと実は「心にも無いこと」を「有る」かのように述べているときである。言いかえると、論者が自己陶酔に陥り、結果として虚偽の言をつらねているときである。

政治演説同様、文学の論文研究においても、能弁にまくしたてているものは、一見論理的にみえても、警戒して読む必要がある。実は先般、この小文のための参考資料として、私の許へこの十周年記念論集二二篇中七篇のゲラ刷りが届けられた。全部を克明に拝読したわけではないが、今回も私は去年の暮に得た感想を思い出したことを告白しよう。具体的にはまたの折に譲るとして、率直にいって、我々には、まだまだ自己検証乃至点検に、あまい点がありはしないだろうか。

研究論文に限らず、随筆でも、いや創作でも、物を書く際の心得として、次の二項に留意したいと思う。第一、まず脳裏に浮かんだ something が、単に思い付きのものでなく、自分にとって必然性のあるものかどうか。第二、その something を文章にうつす場合、正直に、素直に、成心なく移植し得ているかどうか。

伊藤左千夫が、うたに欠かせないものとして「叫び」を強調し、古今集以来いかに叫びがうたから失われたかを慨歎していることは、よく知られている。文学研究、もとよりうたとは異なるのだが、私は、このsomethingにも、叫びが根底にこもっていることを期待したいのである。

Honestyは、日常道徳の徳目として必要なだけでなく、文学の研究にも不可欠のモラルのようだ。

かえりみて他を言うつもりはない。以上は私自身の自戒である。

（東京大学名誉教授・東海大学教授）

まえがき

私たちの新英米文学研究会は、一九七〇年に発足していらい、十年の活動を積み重ねてまいりました。この十年間、私たちは新しい研究方法を求めながら研究の場を創り出す努力をいたしました。この間、私たちは「英米文学の研究、紹介を通じて日本文化の民主的、民族的発展に寄与する」（会則前文）ことを目標にして、個人研究と集団的討論を統一的に発展させる努力を続けてまいりました。ここに流れているものは、個人の能力にたいする信頼とともに妥協を許さない真摯な相互批判の態度であります。研究会の発足当時は十数名にすぎなかった会員も現在では百名に達しております。当初はガリ版刷りから出発した「月報」もタイプ印刷の時期を経て「季報・ニューパースペクテヴズ」へと脱皮し、今年から従来の年刊の「会誌」と合体させ発展させた「季刊・新英米文学研究」の誕生を見るにいたりました。

ここに見られるような研究会活動の質と量とにわたる発展およびその成果は現在の研究会会員の活動によって生み出されたものであることは言うまでもありません。しかし同時にさまざまな理由から現在は研究会活動から離れてはいるものの、その青春のひとこまを研究会活動の歴史に刻みこまれた

少なからざる人々の献身的な努力とそしてまた研究会活動をたえず見守ってくださる方々によって支えられてきていることも疑いえない事実であります。私たちは深い喜びをもって研究会の発展の軌跡をふりかえりつつさらに一層の発展を展望したいものと考えております。

さて、私たちは十年におよぶ研究会活動の積み重ねを経たのち研究会創立十周年を記念し、ここにその成果の一部をまとめ、さらに次の発展への飛躍台とするために論集を刊行することになりました。私たちはこれまですでに生み出されている学問的な成果を謙虚に受けとめるとともに、いかなる権威も怖れず厳しく批判的に摂取する態度を貫きたいとつねに願ってまいりました。しかしながら、私たちの論には、やはり若さにともなう未熟さがあることも認めないわけにはゆきません。しかし発展の途上では未熟さは怖れるべきものではありません。むしろ前進のための契機となりうることを確信しつつ常に細心にして大胆に論を展開し、批判には虚心に耳を傾け、次の成長への一歩としてゆきたいと考えております。この論集が研究会の内外において稔りゆたかな討論の場を提供するものとなることを心から願うものであります。

ここに収録された論文は、研究の方法についてはあらゆる可能性を汲みつくしたいと願う研究会のあり方を反映して、当然多様なものであります。同時に私たちの研究会が一般の企業に働く勤労者、主婦、学生・院生、中学・高校・大学の教員等から構成されており、「新しい型の研究者」を創り出すことを目指しているため、論文の執筆者も多彩であります。

なお、この論集を企画するにあたっては、論文の執筆をすべての研究会員にたいしてよびかけ、提出された論文は刊行委員会が読み合わせを行ない、意見を述べあい、場合によってはその見解を付し

て執筆者に返送し再考をうながすという手順を踏みました。

しかし、刊行委員会は論文の審査にあたったわけではなく、この論集はあくまでも個々の執筆者がその責任において論文を寄せあってできあがったものです。したがって、刊行委員会は各論文の表現上の統一など形式上の整備に関してのみ責任を負うものであります。

一九八一年十月

新英米文学研究会・十周年記念論集刊行委員会

委員長　東郷秀光
庄子　信
野崎嘉信
福士久夫
松田　憲
森本弘幸
山本　證

もくじ

真の叫びをこそ……日高八郎…ii
——文学研究に問われるもの——
まえがき……vi

第一部　イギリス文学篇

真の心の壁の内輪に……塩田　勉…3
——ジョン・スケルトンの恋愛詩をめぐって——
『フォースタス博士の悲劇』……清原　孟…25
——自由なる精神——
『マクベス』における普遍性と悲劇……森本弘幸…42
ケントは何処へ行ったのか……滝沢正彦…59
——シェイクスピアからミルトンへの「否定の否定」の系譜——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

スウィフト論……松本節也…77
——アイルランドの貧民の子供たちについての
いわゆる『私案』におけるペルソナの変容について——
『トム・ジョウンズ』小論……加藤一郎…95
——作品中の愛の種々相について——
「紳士の教育」とチェスターフィールド……庄子　信…112
青年ワーズワス……野崎嘉信…128
——「ルーシー詩」をどう読むか——
『二巻本序曲』の成立と
ワーズワースにおける〈自然哲学〉の生成……松田　憲…147
『メアリー・バートン』論……東郷秀光…168
——ジョン・バートンへの同情とは——
『リトル・ドリット』論……田村正行…184
——外的世界と内面世界の関係——

『われらの共通の友』論……笠原保一……200
『ダニエル・ディロンダ』論……山本博子……222
『テス』のテーマと技法……山根久之助……241
『いと長き旅路』論……向井千代子……260
『息子と恋人』論……山本　證……277
——結末の評価と作品の整合性——

第二部　アメリカ文学篇

『白鯨』の現実像(ヴィジョン)をどう評価するか……福士久夫……297
——いくつかの見地をめぐって——
『シスター・キャリー』の文体……村山淳彦……315

『喪服の似あうエレクトラ』……池内靖子…333
——エレクトラの罪と罰——
『アメリカの息子』……佐沢正博…347
——否定と肯定——
成長の軌跡……内野信幸…363
——マラマッド『修理屋』について——
日系アメリカ文学について……山根和代…381

記念論集の刊行に寄せて

記念論集の出版をよろこぶ……吉武好孝…399
私とアメリカ文学との出会い……永原　誠…400
多様な個性の有効な組織化に脱帽する……長崎勇一…403

「記念論集」の発刊に寄せて……宮田　実……405
英米文学研究における「新」の意味……大浦暁生……407
あとがき……412
執筆者一覧……416

第一部　イギリス文学篇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com